

東中国キリスト者

障害を共に学び共に担う会

シャローム



第一六一号

二〇二四年五月二日発行

目次

説教……玉島教会牧師	高津 俊	(1)
証し……	湯浅寿子	(3)
地域猫との出会いと導き	山本洋子	(5)
我が家に来た戦争のこと	赤澤靖子	(6)
編集後記……	難波幸矢	(8)
別紙・会計報告……	宮脇俊昭	

説教

『こころの視力』

ヨハネ福音書9章1-12

日本基督教団 玉島教会牧師

高津 俊

かつて仕えていた教会でのことです。

ヨハネによる福音書9章に記されている、生まれつき目の見えない人が見えるようになった記事を読んで、キリストを信じることを辞めたという方がおられました。唾で土をこねた泥を目に塗るなんて目に良くないし、それを水で洗ったら目が見えるようになったなんて、そんな馬鹿な話は信じられないとの事でした。

その方は若い頃に病で視力を失われていました。私はその方の家を幾度となくお訪ねしましたが、挨拶もそこそこに件のヨハネ福音書9章は信じられないと強く主張されるばかりでした。奥様が教会生活を楽しんでおられることについては

感謝しておりましたが、ご自分の信仰生活については頑なな態度でした。私はキリストは神様なので奇跡を行うことがお出来ることや、見えるようになることは視覚的な意味だけではなく、気付きや悟りによって物事の真理を把握することでもある、と説明をしましたが納得してもらえませんでした。

その頃の私は、急激な白内障の進行と緑内障による視力低下が始まっていました。その方の背負われている重荷とは比べられませんが、視覚が減退しつつある私なりにその方の心に近づきたいと願いました。しかし目が見えない生活を十分に実感していませんでしたし、キリストの奇跡を否定することには同意できませんでしたので、心の距離は縮まらず、聖書のいう「見える」という語の深い意味をお話しても、届けることはできませんでした。

それから何年か経って私は教会を転任し視力は職務においても支障を自覚する

ようになりました。視覚を通じて受け取る情報の量と質の低下が影響しているのでしょうか、あるいは老化によるモチベーションの減退も無視できませんが、物事を理解しづらくなってきました。そのような状態になって改めてヨハネ福音書9章について考えてみます。

ヨハネによる福音書9章のエピソードで注目したいことが2つあります。一つはイエス・キリストが生まれつき目の見えない人のところに近づいたこと。2つ目は唾と土を用いられたことです。生まれつき目の見えない人はいつもの場所に座って物乞いをしていました。座っているとは、その状況の中に留まっていることです。現状では稼ぐことができないので、道行く人々に食べ物などを施してもらうために道端に座っていました。そこへイエスが弟子たちと共に通りかかり、座っている人に近寄ってこられました。目の見えない人が求める前に、救い主の方から近づかれたのです。

少し飛躍した例えですが、現在の私達のところにはすでに聖書がある、ということに似ています。聖書が傍らにある経緯は様々でしょうけれど、私の傍らに神の言であるキリストがいてくださっているということです。つまり、救いは私たちの努力の積み重ねによってではなく、キリストが近づいてくださることから始まります。私たちの傍らに聖書があるということは、新しい命と希望を与えて下さる生けるキリストがご自身を示そうと傍らに来てくださっているということです。

次に、唾と土が用いられたことについてです。唾は神の御子キリストの口から出たものです。口から出るもので視覚的に見えるものです。息や音声は見えませんが、客観的に口から出たことがわかるためにキリストは唾を用いたと考えてみます。その唾で土をこねました。最初の人アダムが土で形作られたことを想起すると、このエピソードは神の口か

ら出るものと土とで実現した創造の御業だということができます。見えなかった目が新しく見えるようになったのですから、創造の御業です。

ところで、見たことも聴いたこともない事柄に出会ったときに、自分が知らないことを認めて質問したり調べたりすることは大切です。しかし、知識や経験を多く積み重ねていくうちに、蓄えた知識を重んじて自分の外にある情報への感度が鈍くなることがあります。もっと知りたいという欲求が減ったり調べる気力や体力が少なくなってくると、未知の事柄に心が閉じてしまうことを私は実感しています。視力が弱くなり見るのが難しくなると、理解することを諦めたり興味を持たなくなったことが少なくありません。

ファリサイ派の人々はモーセの律法に従うことのできることを認識しようとしませんでした。律法は神から与えられたものですから尊重されなければなりません

が、律法が神を規定するものではありませんし、造られたものが造ったものを超えることはありません。律法は私たちが互いに愛し合い平和に生きるための道を指し示すために神が与えて下さったものです。その愛と平和を実現するために神ご自身が超越した仕方で行動されることがあったとしても、私たちがそれを否定するべきではありません。

見たことも聴いたこともない、経験したことの無い出来事を受け入れるには、自分の限界を知ることと共に、大いなるお方の御業、創造主の不思議、神秘に心を開くことが必要です。それは自身の能力では足りないことを自覚して、キリストの口から出る唾によって視覚化された言（コトバ）と土とによって想起させられる創造の御業に気付くことです。私達の知識や経験を越えた大いなる知恵と恵みに気付くことが、不思議な出来事を受け入れる鍵であると思います。

自分の限界を知り、自分を越えた知恵が近づいてこられたことを受け入れることは、キリストの示される神のみ力を受け入れることです。自分の力だけで解決するのではなく、近づいてくださるキリストに信頼し、神の不思議を受け入れるならば、創造の御業の中に私たちもいることでしょう。

見えづらくなって気付いた私の鈍さと頑なさを認めて、近づいてくださるキリストに気付けるように、自分の心を見つめたいと改めて思いました。

証し

日本基督教団 旭東教会

湯浅 寿子

障害がありながらも、主イエスに結ばれてキリスト者になった息子のことを原稿にというご依頼があったので、ここに記させていただきます。

息子、望（のぞむ）は今から二十八年前、出生時のトラブルが原因で仮死の状態で生まれました。何とか一命は取り留めたものの、酸素不足の時間が長かったために、脳に重い障害を負いました。首もすわらず四肢全廃、明暗の区別はつくだけで何かを見て認識することはできず、言葉も発しません。救急車に何度も乗り、深夜に病院に駆け込むことが日常という状態でしたが、私にはただただ可愛い息子「のんちゃん」でした。今いる南岡山医療センター内の施設に入所するまでの十八年間を一緒に過ごしました。「大変ですね」とよく言っていたきましたが、その大変さが日常だったので、涙したことは覚えていない限りでは一度もありません。泣く暇さえなく、それよりも息子の命を守る、それだけを考えて過ごした十八年でした。幸い本当にたくさんの手助けをいただきながら、支援学校にも通うことができました。卒業後は、通所施設に通いながら自宅で過ごすつもりで

したが、思いがけず現在入所している病院に呼んでいただき、今はそこでお世話になっています。

私自身は今から七年前にあることをきつかけにして洗礼を受けました。（時々、息子さんのことがきつかけですか、と問われますが、直接には関係ありません）受洗の喜びは、今までの人生の中で一、二を争う程の大きなものでしたが、その喜びが大きければ大きいほど、どこかに息子のことをおいてきぼりにしてしまったような気持ちを持つようになりました。私は神さまにつながる事ができたけれど、あの子はどうなるのだろう、クリスチャンにしたくとも、息子の意志を確かめるすべはないし、と一人うつうつと考えました。

そんな中で、私を取り巻く状況にも変化がありました。また息子自身にも一時は命が危ぶまれるときがあり、息子のそばにも神さまにいていただきたいと一層強く思うようになりました。息子の

思いが直接聴けるわけではない、息子がこれから先、教会に足しげく通えるわけでもない。それでも、私と息子にとっての時は満ちたのだと悟りました。

神さまの思いは私の思いを超えていて、神さまの愛は一方的に与えられるものであることを教会生活の中で実感を持って知ったことが、息子の受洗に向けての気持ちを大きく後押ししました。またある日、森先生や教会員の方々が病室を訪ねてくださり、御言葉が語られ、共に讃美歌が歌われたときに、いつもは緊張の強い息子が急に力を抜いて眠り始めたことが、息子の洗礼への意志と私には受け止められました。

病院で行われた実際の受洗の前に、自分の力だけでは信仰告白が困難な息子のために、教会では母親の私、そして教会一同の祈りと誓約によって信仰告白をするという洗礼式が行われました。そしてその五日後の二〇二〇年六月二十六日に息子は洗礼を受けました。

ただその洗礼式は、コロナ禍が始まってすぐで、病院も厳戒態勢に入っただけの時にした。もちろん外部から病室を訪ねたり、息子が病院から教会に出かけられたりするはずありません。そこで無理を承知で、病室ではなく病院の中庭での洗礼式を病院に願い出ました。今から思えば神さまのお導きというしかありませんが、息子の担当の医師がクリスチャンで、病院が万全の安全対策をとりますということと特別に許可を出してくださいました。（入所からずっと関わって下さった医師がクリスチャンであることは、その時まで全く知りませんでした）そしてその医師も中庭での洗礼式に立ち会って下さり、無事に洗礼式を終えることができました。その後、コロナの事態がどう推移したかを思えば、奇跡のような洗礼式でした。

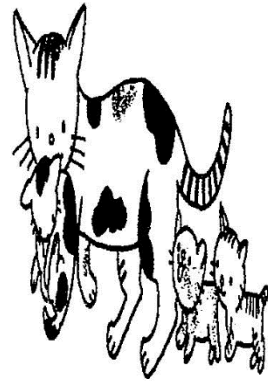
最後に、教会で洗礼式が行われたときに、私が教会員の皆さんにお伝えした言

葉を記して、この文章を終わりにしたい
と思います。

「今、ここにおられる皆様が、息子の
信仰と一緒に支えてくださるのだと分か
りました。もう何の不安もありません。
息子を神さまにお任せし、この旭東教会
の一枝に連なる者としてこれからも息子
をよろしくお願いいたします。神さま、こ
れから始まる息子のキリスト者としての
歩みを、あなたの深い愛のもとでお支え
ください。そして、息子の受洗を願って
ください、息子と共に生きていくと誓っ
てくださったここにおられるお一人お一
人をどうかお守りください。貴いイエス
様のお名前を通して、この祈りを御前に
お捧げいたします。アーメン」

息子は今も病室のベッドに横たわる日
々です。教会から届くお誕生日カード
やクリスマスカードを枕もとに飾り、「の
んちゃんて、クリスチャンなんだよね、教

会いいねえ」と言ってもらって、小さな伝
道をしています。



地域の猫との出会いと導き

日本基督教団 岡山博愛教会

山本洋子

私が隣の町内の猫屋敷状態だった家の
猫達の世話始めてから6年弱になりま
す。

数年前に家人のおじちゃんが病気で亡く
なり、猫達だけが取り残されてしまいま
した。元々、猫達は家の外と中を自由に
出入りし、近所にも迷惑をかけていたよ
うです。そこのおじちゃんが家に居つ
いた1匹の野良猫に餌をやり始めたのが
きっかけで、どんどん増えて子供を産み、

すごい数になり、地域猫を始めた同じマ
ンションの友達が手伝って世話をしてい
ました。おじちゃん亡き後、彼女一人
では手に負えず、協力しているうちにい
つしか私の担当に。

今は家の中は禁止にして、友達や近所
の方々の理解と協力の元、猫達のお世話
をさせて頂いています。毎朝毎晩、エ
サやりとトイレ掃除、庭の草抜きや手入
れや片づけ、周りの道路まで厚かましく
掃除しています。クリスチャンの私が、
隣の敷地の荒れ果てて誰も守る人のいな
くなったお稲荷さまのお社も掃除してい
ます。どこの場所でも神様はいらっしゃ
いますからね！？

近所の方から糞尿の相談があれば、掃
除を含めていろいろと工夫して対応。
次々と生まれていた仔猫たちは保護して
里親さんを探し、大人の猫は避妊去勢し
ました。近所に迷惑をかけないように、
ノミ駆除も、病気やケガになれば獣医に
相談して飲み薬も与えています。たく

さんいた猫達も交通事故で亡くなったり、オスは旅立ったり、貰われたりで今はメス3匹になりました。残されたこの子たちがこの世からいなくなるまで、私に与えられた使命なのだと・・・少し大げさですが。

きつかけは、気になりながらも意識してその家の前を避けて通っていた私ですが、6年前にその玄関の前で餓死寸前の骨と皮状態で動くこともできない仔猫を保護してからです。こんなところで命を終えるなんて・・・なぜ生まれて来なければならなかったの？最後位、暖かい家の中で看取ってやりたい・・・と思ひ、おじちゃんの了解の元、自宅に連れて帰りました。末娘と一緒に毎日、獣医さんに通い点滴。2時間おきにミルクを作りシリンジで与え、体を温め・・・今では大切な家族の一員です。

その子を見つけたのが猫好きだった次女の召天記念日だったのです。まだ生きていたいーと願ひながら、若くして病

気で天国に行ってしまった次女が、自分の代わりに仔猫の命を託したのだと思いました。神様も粋な出会いを用意されるものだと・・・

マタイ25章40節「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである」45節「これらの最も小さい者のひとりにしなかったのは、すなわちわたしにできなかったのである」猫と人間と一緒にするな！と怒られそうですが、周りにいる猫も犬も、野生動物ではありません。すべて人間のせいで「野良」になつてしまったのです。文句も言えず、精一杯生きていく小さな命です。3匹に限らず、これからもたくさん的小さな命に目を向けて、自己満足ではありませんが地道に活動させて頂こうと思います。神様、猫達との出会いとお導きに感謝します、これからお守りください。

「我が家に来た戦争のこと」

日本基督教団 倉敷教会

赤澤靖子

一九四二年、私が生まれた時、日本は戦争をしていました。東南アジアへの侵略戦争アメリカの攻勢に押されて敗色が濃厚でした。

二歳の時、「大きくなつとけよ。帰ってくるからな。」と言ひ、父は出征したそうです。覚えていないし戻つても来なくて、私の中に父の実体はありません。

一九四五年夏、天皇が負けを認めて、許しを請うて戦争は終わりました。敗戦です。

父の戦死の報はその頃入りました。遺された者や物を守つて、母は長男の嫁として気丈な寡婦になりました。後々「賢くないなさい。お国は国民を騙します。」と度々言ひました。負け戦と解つていたのに駆り出して、大事な人が死んだと怒つていたのでしよう。見抜けなかった自

分にも、腹が立ったのでしよう。解ったとて国民には何も出来ないのが戦争というものだつたでしように。

五歳の夏、名譽の戦死、英靈の帰還と奉られて、父の遺骨が帰つて来ました。駅まで行列をして出迎え、盛大な葬儀をしました。忙しく働く大人の端っこで「お骨つて何？」覗いて私の眼が見たものは二個の石でした。「おばあちゃん、箱の中は石ころだよ。」と訴える私に「大きな声を出すでない。」と厳しく祖母が叱つたのです。周りの人らは皆解つていたのです。当時ミャンマーの奥地に誰が収骨に行けたでしよう。そこら辺の小石だったのかも知れませんが。不都合は子供には説明しない大人の勝手を知った「石ころ事件」でした。「大人って！」と反抗する子が誕生しました。

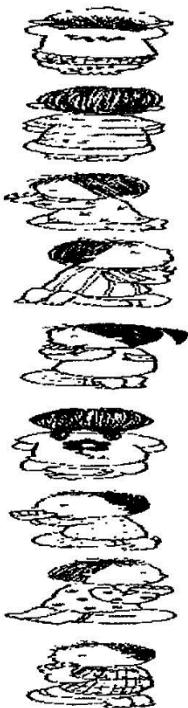
五年生の時、父の部下だという人が訪ねて来られ、父の最期の様子が解りました。マリアに罹り、食糧不足と薬も無く、衰弱してしまつたとの事。「僕を置いて君らは進め。」と言つた覚悟の最期を知りました。「ほおつて帰つてごめんない。」「僕らだけ帰つて許して下さい。」涙ながらに何度も謝られました。「来難かつたろうに、よお知らせて下さつた。」と祖母が声を上げて泣きました。伝えに來なければあの人たちの戦争が終わらなかつたのだらうと、あとから私にも思えました。

強氣な母は氣丈を貫き、よく働きました。病を得て後に、宗旨を替え人柄も替えて、筋金入りのクリスチャンになって壽命を生き切りました。

辛く悲しい思いをした人ほど、戦争なんか二度とするものじゃないと思つた筈です。八十年昔のことになると薄れていくもののようにです。日本政府も危うい事を言い出しました。戦争のせいで父の居なかつた私は、何が出来るか解りませんが、しつかり見張りの人をしなくてはいけないと思つています。

その時はその人なりに一生懸命生きただらうと、時々詠つた短歌を後に添えます。

・征く朝に高い高いと抱き上ぐと聞けども父を知らない私
・出征の父見送りし二歳半五歳の夏には遺児となりしよ
・英靈となりて小箱に父帰る五歳の眼は見た石ころ二つ
・農の息に届ける術なき米のこと戦病死嘆く祖母の涙よ
・「父さんも誰かを撃つて殺したの」帰還してたら問うたか私
・幼な子と祖父母と父母と若き妻征きて還らぬ人は残せり
・動けずにおかれたままの父の骨土に還れば育つもの有り



編集後記

難波幸矢

愛するキ障共会員の皆様いかがお過ごしですか。2023年12月末にシャローム160号(総会特集号)をお送りして以来です。

2024年は、たった4ヶ月の間に、年明けから能登半島地震に始まり、あまりオオゴトに伝えられないでいたイスラエルとパレスチナの争いがニュースの上で堂々と表面化し、ロシアのウクライナへの侵攻がすっかり新聞の一面に載るようになり、あつちでもこつちでもきな臭い等と言っているところではない状況になってきました。

つづくと思うのですが、ヨーロッパのように、国が右も左も後ろも隣接していたら、今の能天気な日本の政治家たちだったら、とつくの昔に国を失っている所でしょうね。

島国で良かったというのも変ですが、そう言いたくなるほどあつちでもこつちでも争いの状況になってきました。勿論それぞれ長い争いの歴史があることですが。

話は変わりますが、今年皆さんはお花見に出かけられましたか。どこもとてもきれいな

でしたね。私はこの時期、毎年、忘れられない思い出があります。夫、難波紘一が亡くなつたのは4月1日でした。1987年、45歳でした。この年は暖かかったのか葬儀は花吹雪の中でした。死ぬ前日まで普通に生活していましたので、高校の社会課授業の新年度の準備を済ませて、そして私の実家、松山へ春休み旅行でした。そして到着した次の日、早朝に亡くなったのです。この春は、彼は何となく死期が近づいてきたと悟つたのか、家族での花見を度々開こうと誘つたのです。子どもたちは少しうんざりした様子で、「もう行つたよ」と言うのですが、あそこへはまだ行つていない、こつちはまだだと、とにかく行こうと、あつちでもこつちでもお父さんと敷物を敷いてお花見で鍋を囲み、写真を撮り、思い出を作っておきたかったのです。後

楽園や護国神社前の広い公園や、旭川の土手や。そんなことを思い出すほど桜並木が美しいです。

さて「ロナも収まり?」いろんな会が行動を再開しつつあります。キ障共も以前はバス

で鳥取まで梨狩りに行つたりしたのですが、長く講演会等も控えてきました。そろそろ動き出したいと思っています。控えてきた分、皆さんから頂いてきた会費など、お金があります。少し遠い所の講師もお呼びできます。

ぜひあの方の講演が聞きたいという講師がいらっしゃいましたら難波が役員の誰かにでも連絡ください。検討させて頂きます。連絡をお待ちしています

「シャローム」 第二六一号

発行日 二〇二四年五月二日

発行所 東中国キリスト者

障害を共に学び共に担う会

発行人 事務局長 難波幸矢

〒七〇三ー八二六五

岡山市中区倉田六五八ー八一

電話 〇八六・二七六・二四六七

振替 〇二三二〇・〇・九〇七六九

加入者 「東中国キ障共」